

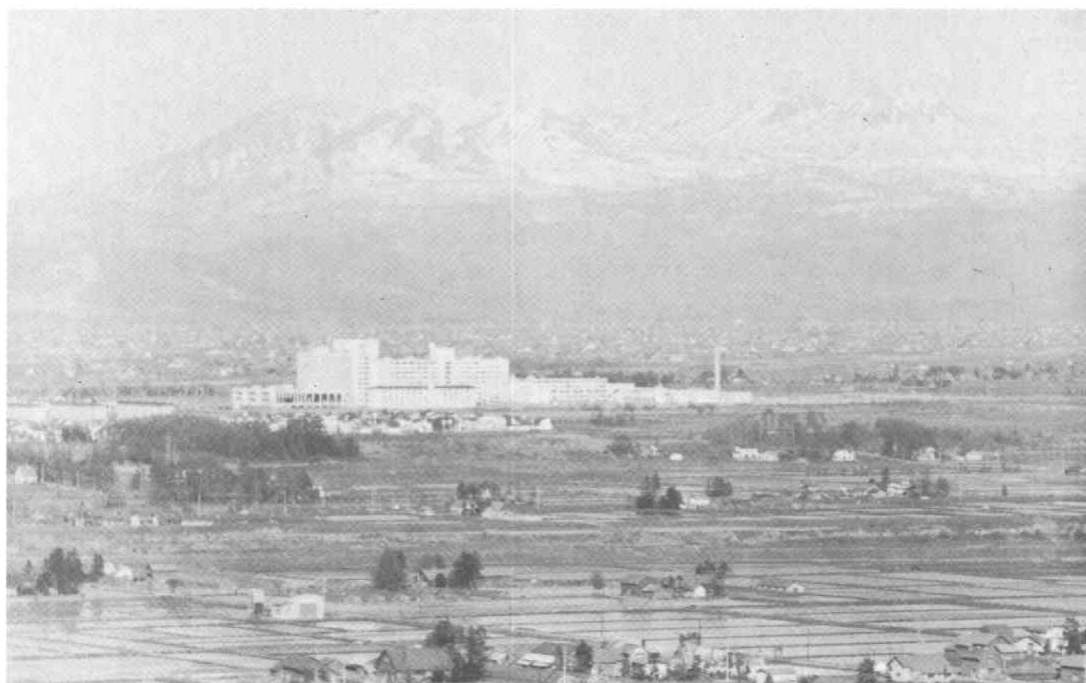


第 12 号

昭和52年9月1日

編集 旭川医科大学
厚生補導委員会
発行 旭川医科大学教務部学生課

(題字は山田守英学長)



旭川医科大学遠景

内 容

研究について近頃考えること……………松嶋少二… 2	研究室紹介……………水野文雄… 7
第三の医学……………竹光義治… 3	旭川医科大学談話会…………… 7
新入生合同グループ研修…………… 4	短 信…………… 7
第3回医大祭開催…………… 5	計 報…………… 8
第24回北海道地区大学体育大会…………… 5	計 報…………… 8
第20回東日本医科学学生総合体育大会夏季大会… 6	窓 外……………森 茂美… 8



研究について 近頃考えること

松 嶋 少 二

私がこの大学に着任して以来すでに4年目に入った。はじめの約2年間は講義・実習の準備に没頭し、研究までは仲々手が回らなかったが、教室員各位の必死の努力によって昨年頃からぼちぼちよい研究成果が得られるようになった。しかし、ここに到るまでには当然のことながら多くの困難な問題を乗り越えなければならなかった。私どもは形態学的方法を用いて研究を行なっているが、どの分野においても、研究というものは研究者の思惑通りにならないのが常のようである。したがって、研究を進めていく過程で種々の障害に直面した場合に、これを克服するに足る強固な意志力が研究者には必要になる。私は元来きわめてしつこい性格を持ち、少々のことではあきらめない。しかし、いかに執着心が旺盛であっても、長期間にわたってよい成績が得られないときは、しばしば自信を失いそうになり気が滅入ってくる。このようなときは常に自分に暗示をかけることにしている。すなわち、「貴様はこの世の中で誰よりも有能な人間であり、死にものぐるいで事に当たれば必ずと道は開けるのだ」と自分に言い聞かせるのである。平素は自分がこのように有能な人間であると夢にも思ったことはないのであるが、ウソでもいいからそう信じ込むのである。すると多くの場合道はちゃんと開けてくる。読売ジャイアンツの王貞治選手は、自分は必ず打てるのだという自己暗示のもとに打ち込みの練習をつづけ、ついにはスランプから脱出するというが、私の研究克服法と類似していて興味深い。私は旭川に来てから、このような自己暗示法を何回となく試みその成果は実証済みである。今後もこの方法を大いに活用していきたいと考えている。

研究を遂行する場合、研究者はきわめて長期間にわたってあるテーマについて思考を持続させなければならない。その意味においても執着心は必要である。しかし、私のような立場の人間は1年間毎日々々研究に関することを考えるわけにはいかない。その間には講義もあるし、またしばしば会議に出席しなければならない。私は会議の席ではあまり多くは発言しないが、それでも会議中は私の脳は議題で占有されている。したがって、会議が終る頃には私の頭は「会議頭」になってしまっているのです。終了後直ちに研究をはじめわけにはいかないのである。その結果、しばらくは研究が中断されることになる。これは非常に困る。その対策として考えられることは、「会議頭」から「研究頭」への切り換えをできるだけ早急に

行なう練習をすることであろう。これは今後の課題である。

人間が活発に研究活動をつづけることができる時間は有限であり、私にはせいぜいあと20年しか残っていない。その限られた時間内により多くのよい研究をなすにげるためには、与えられた時間を最大限に利用するしかない。時々、自分が「孫悟空」のようにならないものかと思うことがある。髪の毛を1本づつ抜いて手のひらにのせ、ふっと一吹きして別の自分を大勢つくり、「貴様には電子顕微鏡写真の撮影を一切まかせるからしっかりやれ」などと命令できないものかと考える。まったくたいのみな話であるが、しかし、アメリカでは似たようなことが実際に行なわれている。すなわち、考えるのは研究者であるが、多数の研究助手が別の自分の役目をしている。したがって、アメリカの研究者に対等な戦いを挑むためには、私どもは研究の量より質で対抗するしかないともいえるが、量があってこそ質も向上するという面もあることを考えると困惑せざるをえない。いかにして世界の研究者たちに遅れをとらずに研究を発展させようかは、今後も大いに考えていかなければならない問題である。

私は松果体の研究をしているので、できれば一生のうちにこの器官の機能を明らかにしたいという遠大な夢を持っている。しかし、この夢は大きすぎてとうていかなえられそうもない。人間の力は、自然の大きさからみれば、それこそ海岸に延々と広がる無数の砂利の中の1粒にも匹敵しないことは十分理解しているつもりである。私どもの教室で得られた成績が組織学の教科書の中に入った1行でも掲載されたならば本望というべきかも知れない。しかし、結果はどうであろうとも、可能なかぎり努力を重ねるならば、研究生活を終えようとするとき後悔することはないであろう。今日の時間を大切に、今後も研究活動をつづけていきたいと考えている。

(解剖学第二講座 教授)





第三の医学

竹 光 義 治

いよいよ旭川医大でも臨床実習が始まる。新しい大学、新しい教育方法の下に如何なる立派な医師が育つか、教える方も教えられる方も胸がふくらむ処である。何事も初めが肝腎。医学の根本理念に立って、患者への思いやり、科学的で正しい観察力、深い洞察力の涵養、広範な医学知識の応用能力などしっかり身につけてほしい。

われわれの携わる保健医療業務には三つの分野がある。第一は「疾病の治療」第二は「予防」そして第三は「医学的リハビリテーション」である。今日、科学技術としての医学水準の向上は目ざましいものがある。殊に感染症は30年前の数十分の一に減少し、罹患してもよく治るようになった。しかしこゝで安心してよいであろうか。

Kさん(45才)は薦職として25年余り高層建築現場で働き、今でも梁の上では若いものに負けない技術で会社からも信頼され、3人の子のよきパパでもあった。2年前、鼠蹊部から大腿内側部にかけて痛みが始まり、地上での仕事も出来なくなった。鍼灸や病院を転々としてみたがわからず、半年後大学へ来た時には歩行は不能で、かなり破壊の進んだ股関節結核であった。患者は同時に糖尿病も発見され陰鬱な表情であった。化学療法、食餌療法の下に病巣廓清術、股関節固定術を行い経過順調、5か月後にはほぼ癒合し、立って数歩は歩けるようになり表情も明るくなった。しかし、まだ膝に拘縮がありうまく歩けないため、リハビリテーション部門に転棟した。

1月程した頃Kさんはまだ痛いと言ってあまり練習をせず、夜もあまり眠れぬとのことであった。しかし幾ら詳しくみても股関節はよく治っている。そこで精神科の同僚にたのんでアプローチしてもらったところ職場復帰が出来ないことが最大の原因のようであった。こゝで主治医は会社の労務係を呼びよく説明した処納得し新しい職業訓練をした後、同じ会社へ帰ることを約束された。患者はみるみる意欲をとり戻し、2か月後には職業訓練所に入所、その後4か月で復職した。

さてこの場合結核を治し、股関節が癒合して立てるようになるまでが第一分野の医学であり、膝関節の拘縮をとり、短期間に階段が昇降出来る段階まで能率的に指導し訓練したり、精神的意欲を回復し、糖尿病を含めた生活指導をするのが医学的リハビリテーション即ち第三の医学である。Kさんがもし数歩しか歩けない段階で自宅に帰り、あとは薬物投与だけと言うことになったとするとどうなったであろうか。膝の拘縮は残り、精神的不安は

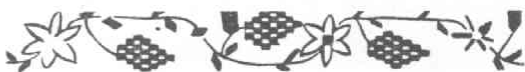
増々充じ、駅の階段もうまく昇れず、社会復帰、即ち眞の治癒はおくれ精神的苦悩、経済的負担はきわめて大きく、しかも好ましい条件ではなかったと思われる。

この第三の医学—三番目に大事と言う意味ではなく、第三番目に開拓され始めた医学分野と言う意味である—リハビリテーションは患者個人の幸福のためのみならず社会的経済的要請からも生れたものである。身体部分の「病氣」は治っても社会に復帰出来なければ本当に治ったとは言えない。身体障害者が増加すれば国家として生産活動がおちるばかりでなく、生活補償のため多額の予算を用意しなければならないことになる。有名な例を引こう。1952年国連のWHO技術援助によって南米グアテマラに厚生省のリハビリセンターが幾つか創設された。その結果、労災患者の平均治療日数は1952年の203日から1955年には37日に短縮せしめた。また同時にCash benefit(補償金)をうけずに完全労働能力を回復した患者の率は1952年の43%から1954年72%に増加した。労働能力の完全喪失のため一時金と年金をうけたものの数は1952年8.3%から1954年3.0%へと減少した。

医学は雑学とも言える。殊にリハビリはそうである。何が役に立つかわからないしvarietyに富んだ知識、思いがけない知識が必要とされる。図工、音楽、体育、その他小中学校、高校の大半で習ったもので役に立っていないものはない。これらはことにOccupational therapyに応用されている。

一般教養では、どの治療法を選ぶかと言うとき、患者さんの年齢、性、社会的環境と共に両者の人生哲学、宗教観が判断の基準となり、医師には高い教養と人格が要求される。こんなとき患者さんの幸福を考え、ゴールをどう選ぶかは大きなキーポイントである。高度の社会的治癒をめざし、残された身体的精神的機能を最大限に啓発し高めようとするリハビリ「学」が独立して専門的に研究され始めたのは確かに新しいが、既に確固たる地歩を築いている。診療記録にはPOS、教育にはGIO SBOs systemをとり入れた新進気鋭の旭川医大からは、この第三の医学をとり入れた優秀で人間的な医師が育つことを祈ってやまない。

(整形外科学講座 教授)



新入生合同グループ研修

第1学年学生の親睦を深め、グループ構成員相互の懇親をはかる新入生合同グループ研修は、去る4月29日(金)、30日(土)及び5月7日(土)、8日(日)の2回、組別に、層雲峡簡易保険保養センターで行われました。

4月29日(金)、12時20分に学長、下田副学長はじめA組学生41名、グループ担任5名はバスに乘車し、残雪の光る上川の山野を眺望しながら一路目的地へ向いました。経費節約のため(?)みめ麗しいガイド嬢ならぬ学生課職員から歌集や大雪山系の自然についての資料の説明を受け、隣人紹介のための相互「取材」が行われ、車中賑かにバスは進みます。



保養センターに到着した一行は宿泊室に荷物を入れ、すぐ大広間に集合。早速円陣を組んで隣人紹介が始まりました。出身高校、趣味、性癖等のユーモア溢れる紹介に笑声が絶えず、又、自己評価と隣人の評価との落差に顔を掻くペアもあり和やかなうちに紹介を終えました。それぞれ参加者の顔と名前が一致したところで、学長から今回の企画の目的が話され、特に「懇談の内容を豊かにするのは参加者自身なので、創造性に溢れ、友情を深めることのできる場を作り上げて欲しい」旨、挨拶があり、グループ毎の懇談に移りました。

懇談では予めプログラムに掲載されていた「なぜ医大を選んだか」「医大生活への期待」「望ましい医師像」の3テーマを参考にして各グループで話題を選定し、熱心に話し合いが行われました。



各グループの意見発表後、自由時間をはさんで夕食。たちまちお櫃は空になりましたが、米飯のお代り自由とあって各自十分に腹ごしらえをして、準備万端を整え懇親会に臨みます。懇親会は、手拍子や流行のボデイアクションも飛び出し盛会のうちに終了、グループ毎の懇談に移りました。昼間の懇談を続行し未明まで語り明かすグループ、トランプに興ずるグループ、映画「大雪山」を観賞するグループ等々。

翌30日は風もなく穏やかに明け、懸崖の上から顔を覗かせた朝日を迎いでラジオ体操。朝食の後、層雲峡見学の準備を終えましたが、この頃から天候が急変し、みぞれ混じりの春の嵐となりました。しかし一同は元気に宿舎を立ちバスに乘車、落下する流水が中途から凍っている流星の滝、銀河の滝を背景に記念撮影を済ませ、峻峻な柱状節理の間を縫って小函、大函へ。

夏季には旅行者で賑わう大函も1メートル余の残雪に覆われていましたが、一行の到着を野性の狐が出迎え、スナップに収まる一幕もありました。ここからバスは帰路につきました。車中、下田副学長から総括を兼ねた挨拶があり予定どおり11時25分に大学に到着、初の研修を終了しました。

天候に恵まれたとは言えず、又、初めての研修旅行であったため教職員にも不慣れな点もありましたが、アンケートにも見られるとおり、一つ屋根の下で参加者相互の交流を深めるという当初の目的は十分果たされたようです。

(学生課)



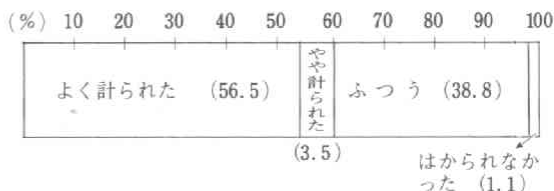
合同グループ研修アンケート

新入生合同グループ研修会参加者を対象としたアンケート調査結果は次のとおりです。なお貴重な意見も多々頂きました。これらは今後の参考とさせていただきます。

(学生課)

設問

グループ及びクラスの交流が計られましたか。



第3回医大祭開催



第3回 医大祭

第3回医大祭が、「偉大なる実験—失われた個性を求めて」をテーマに去る6月16日(木)から6月19日(日)まで開催されました。医大祭の開催にあたり盛り上がりをはかるためプレ

医大祭として6月11日(土)には、ヤマハ旭川センターでかね尺・鯨尺で話題をまいている、永六輔氏の公演が行われ、会場に入りきれない程の入場者を集めました。また、6月13日(月)には、道北経済センターで華やかにダンスパーティが開かれ、学内外に広く医大祭の開催をアピールしました。大学祭初日の6月16日(木)中央公民



館にはハチマキにハッピー姿のみこしの担ぎ手達が集合し、力水を酌み交して元気いっぱい4条通一昭和通一常磐公園を練り歩きました。午後4時には、常磐公園で待機していた蛇踊り、禁煙、水産資源等の、各クラスで趣向をこらした張り子が繰り出し、道行く市民の目を楽しませていました。前夜祭は午後6時から常磐公園で行われ、1年ぶりの樽酒に老(?)若男女は上気嫌。6月17日(金)は、模擬店準備と並行して「忍ぶ川」「市民ケーン」の上映、演劇・合唱等の発表会、学生会の企画した討論会が行わ



れました。6月18日(土)、6月19日(日)の両日は一般公開日にあてられ心理展、政治討論会そして10数店の模擬店、古本市も開店しました。特に「肝臓」「糖尿病」「胃潰瘍・胃癌」の医学展示は、医大祭の中心的企画として人気を集め、入場者はスライド、顕微鏡、模型、標本によって繰りひろげられる説明に見入っていました。

新入生の精力的な活躍が一際目立った第3回医大祭は、両日で4,500人の市民の観覧を得て大きな盛り上がりを見せ、後夜祭のファイヤーストームをもって成功裡にその幕を閉じました。

(学生課)



第24回 北海道地区大学 体育大会

7月9日～7月11日

第24回北海道地区大学体育大会は、北海道教育大学が当番校となり、去る7月9日(土)から7月11日(月)(一部種目は雨天のため翌12日に順延)にかけて、旭川市、岩見沢市両会場で開催されました。本学からは118名が参加し、11種目に覇を競い合いました。

本大会は、サッカー部門での善戦、準硬式野球部門での4位進出などの躍進が目立つ一方、前年度優勝のバレーボール部門で室蘭工業大学に不覚の1敗を喫するなど、波乱に富んだものになりました。

各種目での成績は次のとおりです。



総合成績(男子) 30校中、11位

準硬式野球 1回戦 旭医大10-0 東日大

2回戦 旭医大 2-0 駒沢大

3回戦 (準決勝) 道自短5-0 旭医大

バスケットボール(予選リーグ) 樽商大70-67旭医大
専修短91-59旭医大

バドミントン 1回戦 北工大4-1 旭医大

柔道 1回戦 不戦勝 2回戦 道都短4-1 旭医大

剣道 (予選リーグ) 岩教大 $\frac{5}{8}$ - $\frac{2}{3}$ 旭医大

室工大 $\frac{9}{5}$ - $\frac{4}{10}$ 旭医大

バレーボール 室工大2-0 旭医大

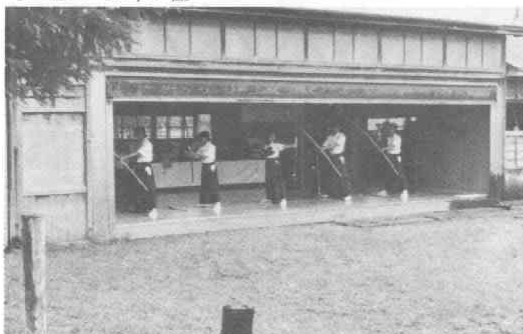
サッカー 道工大2-1 旭医大

卓球 (予選リーグ) 道工大3-1 旭医大

札医大3-1 旭医大

東日大3-1 旭医大

弓道 22中7位



とくに、準硬式野球部は、素晴らしいプレーを見せてくれた。1回戦日大を8X対1、2回戦筑波大を2対1、準々決勝山形大を5対1で破る快進撃をみせ、ベスト4へ躍りでた。8月3日快晴、準決勝の相手は強豪新潟大学。監督はじめ選手は闘志満々プレーボール。早くも1回裏1死満塁のチャンス、5番主将表君が全ナインの期待に応え、ライト越え3塁打、3点先取。よしいぞ!応援も気合がはいる。4回5回相手に点を取られ逆転されたがすぐ1点を返し4対4の同点。いよいよ回もつまって8回裏、3安打で待望の1点。ついにリード5対4、興奮する我軍ベンチ。勝利の女神は我ナインにと。思った。しかし、9回表必死の新潟、堅くなった我チー



第20回

東日本医科学生 総合体育大会 夏季大会

——闘志を燃やした7日間——

阿武隈川が流れる福島盆地、日中35℃夜28℃という猛暑の中、7月31日東医体福島大会の幕が切って落された。我大学からは、準硬式野球、バスケット、バレーボールなど12種目に参加し熱戦、善戦、?敗をくりひろげた。



ムのエラーを誘い、安打を集中し一挙に7点。11対5でゲームセット。狂喜する新潟ナインとベンチ。対照的に肩を落し、あるいは、呆然とする我ベンチ。来年はこの悔しさをうち破ってほしいと願わずにはいられない。

この他、圧倒的声援をうける地元福島医大を、延長タイムアップ寸前76対75で振り切り、ベンチを熱くさせたバスケットボールの面々、終了間際同点にされPK戦の末惜しくも敗れ、涙にくれたサッカーのイレブンたちの清々しい印象も忘れない。

「勝つ楽しさ敗ける悔しさ」。基礎体力、技術の向上とともに「ピンチになった時の冷静さ」を課題として心と技を磨き、今年を上回る活躍を各クラブに期待する。

——速報入。バレーボール部初優勝!!——

(学生課)



研究室紹介

■細菌学講座■

水野文雄

当教室は、研究テーマ・実験内容から観て、「細菌学」というより、「ウイルス学」教室と呼ぶ方がふさわしい。以下に、その概略とスタッフを紹介したい。

研究テーマは、①ウイルス増殖機構とインターフェロン、②Epstein-Barr (EB)ウイルスによる細胞がん化機構、の2つに大きく分ける事ができる。

①のテーマは、東教授を中心に実験が進められている。ウイルス性疾患の治療と防御という大目標を見すえつつ、現在は特にインターフェロンに取り組み、その産生と生体防御機構を追究中である。吉田助手は、培養細胞を使って、インターフェロン誘発の初期過程を、又、末永助手は、マウスを使って、ウイルス感染症に対するインターフェロンの防御作用を調べている。

②のテーマは、水野が実験を進めている。EBウイルスによるヒトリンパ球の試験管内がん化の機序を探ると共に、生化学的手法を用いて、がん細胞染色体に存在するウイルスゲノムを検索し、リンパ腫発生とその防御機構を追究している。

近年、インターフェロンが抗腫瘍作用を持つという報告が集積されており、①と②の流れの接点も注目したいところである。

これらの実験・研究の支え役として、西塚技官が頑張っている。実験器具の洗浄、事務関係、秘書役と、何人分もの仕事を明るい笑顔でこなしている。

その他に、動物実験施設の中谷氏らが、犬血清中のブルセラ菌抗体価測定を始めとする疫学的研究のために来室し、教室スタッフらと共に、遅くまで実験室にこもる日もある。

動物あるいは培養細胞を扱う実験の性格上、夜中まで実験が続く事も多く、当教室は不夜城の感がある。時にalcoholで英気を養い、来室する学生諸君と議論し、研究室で夜明けを迎える事も稀ではない。教授自ら千歳鶴を持って夜更に出現する事もしばしばである。スタッフ全員、まだ若さを失っていない。

(細菌学講座 助教授)



旭川医科大学談話会

本学談話会が次のとおり開催されました。

昭和52年度談話会幹事

石井兼典

黒島晨汎

第30回 5月18日(水) 司会 久保良彦(外科学第一講座)

(1)「北海道におけるアルコールの疫学」

助教授(衛生学講座) 本間 寛

(2)「十二指腸潰瘍患者に対するParietal Cell Vagotomyの現況」

助教授(附属病院手術部) 齊藤孝成

第31回 7月6日(水) 司会 齊藤孝成(附属病院手術部)

(1)「びまん性肺疾患における気道病変」

教授(附属病院検査部) 牧野幹男

(2)「時間・線量関係」—TCD₅₀と時間・線量関係—

助教授(放射線医学講座) 菊池雄三

なお、本年度は、上記第30回、第31回のほか、下記のとおり談話会の開催を予定しておりますので、教職員、学生諸君が多数御来聴くださるよう御案内します。

昭和52年度談話会実施予定表

回数	開催月日(曜日)	演 者	司 会 者
32	9月21日(水)	海野徳二(耳)	江端範名(麻)
33	10月19日(火)	原田吉雄(整)	関口定美(外二)
34	11月16日(火)	酒井忠一(眼)	水元俊裕(皮)
35	2月15日(火)	建部高明(内二)	上口勇次郎(生)

開催時間 午後3時から3時間程度

会 場 第7講義室

短 信

❖ 昭和52年入学試験 ❖

昭和52年度入学試験が、去る3月23・24日の両日にわたり、本学と旭川東高等学校を試験場として実施されました。入試結果は志願者数2,685、受験者数1,733、合格者数104、入学者数101(女子12)、現役合格者数40、競争率16.7倍でした。(学生課)

❖ 昭和52年度入学式 ❖

昭和52年度入学式は、新入生、父兄、教職員250名が出席し、4月15日(金)午前10時から体育館で挙行されました。開会の辞、入学許可に続き、入学生代表が希望に満ちた宣誓を行い、学長から「本学の良き伝統を形成し、国民の信頼に応え得る医師、医学研究者となるよう」に式辞が述べられて、厳肅に新入生101名の入学が祝われました。(学生課)

訃 報



去る昭和52年4月10日(日)午前5時、市内神居5丁目の住友マンションの火災のため、第4学年学生 馬淵猛君が急逝しました。

馬淵君は北海道札幌南高等学校を卒業し、

希望に燃えて本学に入学、熱心に勉学する傍ら課外活動でも趣味の映画鑑賞を生かして映画研究会に所属し活動していましたが、志半ばで不帰の人となりました。ここに馬淵君の御冥福を心からお祈りします。

(学生課)

訃 報



去る昭和52年7月29日(金)第5学年学生 村上宏二君が急逝しました。村上君は北海道小樽潮陵高等学校を卒業し、新生旭川医科大学の第1期生として入学、熱心に勉学する傍

ら文芸部の結成に参加し、棧敷最新号にも投稿するなど活発に活動していました。

村上君は7月22日から1週間の予定で国立療養所奄美和光園の病院研修に参加していましたが、遊泳中に窒息死したものです。村上君の御冥福を心から祈念します。

(学生課)



窓 外

森 茂 美

■レニングラード第一医科大学における留年■

▲モスクワ滞在中にレニングラードとキエフを訪れる機会を得た。レニングラードではバプロフ研究所、比較生理学研究所などソ連の代表的研究所を訪問したが、もっとも印象に残ったのはレニングラード第一医科大学を訪れたときのことであった。

▲まず学生の定員であるが、一学年約300名でありその数は地域社会の医療を充足する必要数から逆算して決めているということで、必ずしも毎年一定しているわけではない。したがって多少の落ちこぼれはあるにしても、卒業予定時に大巾にその数が狂うと、それは単に医科大学レベルの問題にとどまらず、地域社会の医療を根底から破壊する大きな社会問題にまで発展してしまうということであった。そこでヤボな質問とは承知の上で、いわゆる進級する能力に欠けていると判断される学生との対応をどのようにしているのかたずねてみた。

▲その答えの第一は医学生へのかなりの経費がかかるので、留年者の増加は国家経済に多大の損失を与えることになる。そのような学生は医師になる素質に欠け

ていると判断される。第二に担当教官とくに教授の指導能力が厳しく問われるので、教育にかなりの時間をさいていること、第三に止むを得ず留年に相当する学生が出た場合には、予定通り進級卒業させるが医師免許証は与えず他の職業に従事させるなどであった。

▲このような考え方に基づくと、留年になる学生は特殊な場合を除いてまずあり得ないということになり、逆になぜそのような質問をするのかとたずねられた。いろいろ話題が出たあとで最も重要な問題がどこにあるかと考えてみると、それは明らかに入学希望者の選抜方法にあるような気がした。日本の医科大学と同様に、ソ連においても定員をオーバーする志願者数があり、入学許可の判定に重要なポイントは基礎科目の能力と医師になる適性であるという。その中には当然意欲も含まれている。

▲最近我が国の新聞紙上を賑わしているのは、入試方法の改善すなわち選抜に関する足切りの問題である。これが受験生の負担軽減につながるのかそれとも新しい不安を生み出すのかは今後の推移をまたねば即断できない。しかしここで重要なのは、入試方法の改善が入学後の勉学意欲とどのように関連してくるかということであろう。

▲モスクワ滞在中に、いわゆる受験生をもつ同僚研究者が日本では考えられない深刻な悩みをかかえていた。ソ連において高等教育をうけることができるか、できないかは日本とは異質な問題を含んでいるように思われる。

(生理学第二講座 教授)

窓外カットはShevchenko Opera and Ballet Theatre (KIEV CITY)